



令和5年度

「豊かな心を育むための環境教育はいかにあるべきか」
～環境教育指導者の指導力向上をめざして～



栄町立安食小学校

猪瀬 裕子

1. 研究主題

豊かな心を育むための環境教育はいかにあるべきか

～環境教育指導者の指導力向上をめざして～

2. 主題設定の理由

(1) はじめに

現在、自然現象や人間の関わりによる環境汚染や温暖化による自然破壊など地球環境の悪化が深刻化し、環境問題への対応が人類の生存と繁栄にとって緊急かつ重要な課題となっている。豊かな自然を守り、私たちの子孫に引き継いでいくためには、エネルギーの効率的な利用など環境への負担が少なく持続可能な社会を構築することと現在の自然環境の保全を真剣に考える児童の育成が大切である。

学校は、子どもたちの人間形成に大きな影響を与える場であり、児童が環境に対するモラルやマナーの習得を通して、環境に関する知識を身に付けるのみならず、環境に配慮した行動が習慣として実践できるような場としての役割も担っている。また、集団活動を通して、環境問題の解決に不可欠な「人と関わる力」を養うことができる場でもある。

しかし、近年メディアでも多く取り上げられるようになり、急速に浸透してきている「SDGs」。教育現場の中では「聞いたことはあるけど難しそう」「具体的に何をすればよいのかわからない」「新たな学習を取り入れる時間の枠がない」と言った現状が見られる。

そこで、年間を通して教科・領域の中で環境教育を意識して連携することで、「持続可能な社会を作る」にはどうすればよいかを一人ひとりが自分ごととして考え、行動していく姿勢を育てていきたい。

(2) 実態から

安食小学校は高台に構え、水田地域や利根川が見下ろせ、遙か彼方には富士山、筑波山を望むことができ、豊かな自然環境に恵まれている。創立150年の歴史がある本校は、西市で栄えた古くからの商店街と農業地帯、新興住宅地の混在する町である。本校は栄町の中心地区に位置する学校で、保護者や地域住民の学校教育への関心は高く、学校への支援について様々な面で多くの住民からの支えを得る協力体制が構築されている。

子どもたちは、大変素直で明るく伸び伸びと生活している。学習に対する姿勢をみると、与えられた課題に熱心に取り組むことはできる。また、課題解決を最後まで頑張ろうとする姿勢も見られる。しかし、積極的に課題を見つけ、よりよく解決したり、自分なりに表現したりすることは苦手で、受け身的な姿勢の児童が多い。また、基礎・基本となる事項の習得には、かなり個人差が見られ、学年によってはその差も大きい。

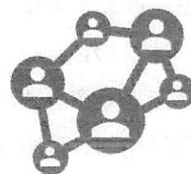
そこで各教科の授業において問題解決的な学習を工夫することにより、未来の地球のために環境に関する事柄に興味・関心をもち、自ら関わろうとする態度や環境への思いを仲間とともに共有し、自分たちのこととして大切にできる児童の育成をめざすことに重点を置き、本研究主題を設定した。



3. 研究仮説

年間を通して教科・領域の中で環境教育を意識して連携することで、「持続可能な社会を作る」にはどうすればよいかを一人ひとりが自分ごととして考え、行動していく姿勢が深まるであろう。

- 体験活動の充実
- 総合的な学習と他教科の関わり（年間指導計画への補足）
- 教科の学習内容と環境教育との関係（E S Dカレンダーの作成）
- まとめの発表の仕方の工夫



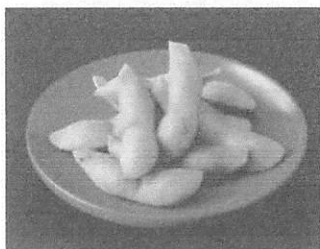
3. 3学年の実践

○栄町のガイドになろう（総合的な学習・9月～2月）

町内の3年生は、1学期に町内めぐりと10月にどらまめの摘み取り体験を行っている。栄町の農産物と言ったら、子どもたちは「どらまめ」と答えるくらい身近なもので2年前から本校は、学校区にあるどらまめ農家への見学と摘み取り体験を行なっている。事前に栄町町役場の経済環境課農政班やJA西印旛東部支店に連絡をすることで、児童に「どらまめ」について作物ができるまでだけでなく、栄町ブランドについても知る機会となった。1学期から、①栄町には何がある。②町の特徴を調べる。③農産物・工場の仕事を調べる。と段階を追ってバス見学や新聞、ホームページなど自分達で調べまとめてきた。中学年の児童に取っては、難しい文章が多く調べてはいるが内容の理解は十分ではないことと、宣伝ののぼりやポスターは知っているが実際どんなものなのか説明できない児童が多い。学級のほとんどが「どらまめ」の名前は知っていた。しかし、どんな物か説明する時に黒豆であったことに気付いていないことがわかった。

このように、児童は実際にその場所に行って観察したり、話を聞いたりといった体験がないと興味や関心をもたないことがわかる。今回の見学や詳しく実際に教えてもらう機会ができたことでまずは、「どらまめ」に関心をもったことがその後の様子から感じ取れる。一つは、給食である。どらまめが提供された時は、食管を開けたときの歓声と会食中の会話や野菜嫌いの児童も口にする様子から「栄町の」といった特別な感情が芽生えていることがわかった。日記や調べ学習の中でも、発展としてどらまめの加工食品に気付いたり他の栄町ブランドを見つけ始めたり児童の行動が積極的になってきた。

児童は、特産物だけでなく、行事（西市）や史跡（大鷲神社・龍角寺・岩屋古墳）、産業（日本食研・よつ葉・紀文）など興味をもち調べ始めた。当然インターネットで調べることもあるが家族や関係者に質問をするなど実際に自分達目や耳を使った活動に発展していった。さらに、150周年行事で発表をする機会をつくることで自分達の調べたことをたくさんの人に伝える経験ができた。



○しぜんかんさつをしよう（理科・4月）

昨年度は、自然発見ゲームであるフィールドビンゴや虫めがねを使ってミクロの世界を探検するマイクロハイクを楽しんだ子供たち。今年の春は、理科の学習として、タブレットを持ち春の校庭へ探検に行き、様々な生き物を発見し記録を撮り観察を続けた。もちろん、桜の花びらのピンクの絨毯や2年生が育てた植木鉢や花壇の満開なクロッカスやチューリップの花たちなど鮮やかな春すぐに見つけ写真に記録できた。さらに観察を継続することで、芝生の中のシロツメグサや黄色いタンポポ、紫色のカラスノエンドウ、青いオオイヌノフグリなど小さな花たちにも目を向けていた。また植物だけでなく、枯れたススキの茎にカマキリの卵を発見するなど生き物の変化や姿の違いにも着目して観察する姿が見られた。タブレットを活用することで、実際の生き物や見つけた場所の様子が写真として記録することができ児童が観察カードにまとめる学習に役立てることができた。



○学校のまわり・市の様子（社会科・5月）

昨年度、地域ボランティアの方々と学校周辺の自然や商店を探検し、身近な自然や地域の生活を見つめる機会があった3年生。今回は、丘の上に立つ学校の展望室から学校の周りの様子を観察したり、バスで町内を巡ったりと栄町の様子を実際に確認することから始めた。展望室からは、学校の周囲にある住宅の屋根、西側に広がる田んぼ東に見える小高い森東西に伸びる線路が見える。自分たちの住む街を上から見ることは、子供たちにとって新鮮で新しい発見となった。また、バスでの町内巡りでは、行ったことがない、知らないなど目にしている意識されていない場所や町内の様子が多く、子供たちにとって実際の場所や様子の確認となり、調べてわかったことを紹介地図にまとめて発表しあうことができた。



○植物の育ち方（理科・6月）

昨年度、野菜を育てた3年生。今年は、みんなで花壇にヒマワリ・ホウセンカ・ツルレイシを育てていく。雑草の刈られた後の花壇を協力して、土を耕すことから始めた。児童は、シャベルを使って穴を掘り、雑草の残った根はふるいで取り除いた。たい肥を運びまたシャベルで混ぜる。ポットで種から育てた苗を花壇に植えることができた。苗から育てた昨年と違い、花壇に植え替えるまでの世話や観察では、発見だけでなく継続観察ができてきた。また、自分達で作りに上げた花壇に移し替えた後も休み時間を利用して雑草を取ったり、暑い日が続くと朝の水やりの量を増やしたりする姿など主体的に行動する態度が見られた。



5. 成果と課題

(1) 成果

- ①外部人材の活用では、保護者や地域住民の学校教育への関心は高く、学校への支援について様々な面で多くの住民からの支えを得る協力体制が構築されていることで、児童の実態に合った人材の確保ができた。人材が十分に確保できたことが、一人ひとりが自分のこととして活動に参加することができた。
 - 児童の発達段階や関連する教科の指導内容など事前に連絡し合うことで、児童の実態に合わせて限られた時間の中で充実した活動を行うことができた。
 - 年間指導計画の中に、「人材の活用の有無・連絡先・依頼連絡時期」などを書き加えることで次年度の引き継ぎができた。
- ②今まで意識することがなかった自然体験を、教員の意識的な活動にすることで、児童は自分と身近な自然とのかかわりに関心が高めることができた。
 - 年間指導計画を変更するのではなく、教科・領域のどこにE S Dの考えを取り入れつながっているかを意識することで難しいことを考えずに教員が学習に取り組めた。
 - 地産地消・フードロス・異常気象・エネルギーなど低学年にはなじみのない事柄ではあったが、児童が身近な環境に興味や関心をもち、働き掛ける経験ができた。
 - 3年生の学習の中で環境教育を意識して連携する教材開発をしていったことで、他学年の教員もその教材に興味や関心を抱き、環境学習を意識した取り組みにつなげた活動を試みる場面がでてきた。

(2) 課題

- ①地域との連携が不可欠であり、地域人材の活用が重要であった。そのための人材発掘が常に必要である。
 - 学校がいろいろな人材の協力体制はあるが、地域の人材の高齢化も見受けられる。新しい世代への連携。
 - 外部人材の活用では、児童の発達段階や関連する教科の指導内容など事前に連絡し合う時間が大切ではあるが、その時間の確保。
- ②昨年度、今年と2年間の取り組みで身近な環境に関心もてるようになったことを今後継続発展させていくためにどうすべきか考えていく必要がある。
 - 昨年度、生活科を中心に検証してきた取り組みを、担任が替わっても継続実施できるよう発信していくのか。
 - 今年度は、生活科から社会科と理科に分かれた3年生を中心に検証してきた取り組みを、どのように各学年で他教科・領域と環境教育との関連を図り、環境教育の視点をもって実施できるように発信していくのか。
- ③2年間継続しての実践検証であり、児童の学習でのアンケートや感想でのまとめだけで、実際の児童の変容や教師側の意識調査を具体的に行うことができていない。
 - 児童の環境に対する意識や考え方が変化しているのかアンケートを学年末に実施。
 - 実際に実践している教師の意識についてもアンケートを実施。